

第 7 章

噴火の記録

7 噴火の記録

噴火の記録については、加藤(1909)や大森(1918)などにより古くから文献調査が行われている。勝井・他(1975)は、さらに詳細な文献調査を行い、加藤や大森らのものとあわせて駒ヶ岳の噴火記録を多数収録している。その後、勝井・石川(1981)や古川・他(1997)によって1694年に関する文献調査が行われた。

ここではこれらの研究をまとめて原文のまま掲載する。

7.1 寛永17年(1640年)の噴火

「新羅之記録 下巻」

(寛永十七年)同六月十三日松前之東内浦之嶽俄尔焼崩勢滄海動揺而□[さんずいに方に米に田](ルビ：つなみ)滔来百餘艘之昆布取舟之人少所引□[さんずいに方に米に田]而□[にんべんに水](ルビ：おぼれる)死畢有内浦之北方宇志之入海在其所慶廣朝臣之令善光寺如来之御堂然此日之□[さんずいに方に米に田]雖上御堂之後山御堂者更無恙可謂奇特事也此時内浦之嶽焼崩硫黄之灰降満虚空國中一日一夜不見日月之光影天地之振動無間公廣朝臣令始阿吽寺之快玄法印衆徒等於八幡宮之拝殿讀誦人王般若妙典之驗國中之振動止天晴是亦可謂般若不思儀也

(高倉, 1969: 新北海道史)

内浦之嶽：駒ヶ岳

俄尔焼崩勢滄海：突然山が崩れて海に流れ込んだ

硫黄之灰：火山灰

「松前年々記」

(寛永十七年)六月十三日午時内浦ヨリ下マテ津浪打、商船ノ者共井蝦夷人共ニ人数七百餘死、同時ニ内浦嶽焼崩、打浦ヨリ松前上之国夷地マテ焼灰フリ、クラヤミ同十四日ヨリ十五日マテクラヤミ入、辰ノ時少宛晴ル、十五日十六日マテハ少ツ、降、右ノ焼灰松前ニテ見候雲ノ様子丑寅ヨリ紫雲色々出、其雲四方エチリ頓而少宛灰フル、其前松前ニテハ海ノ様子少宛塩ノ差引有之、蝦夷ノ国ニテハ津浪前ニ事之外山鳴無程津浪打毛虫ナドモフル。

(榎森, 1974: 松前町史)

「松前年歴捷徑 天、地」

庚辰 (寛永) 十七 夏六月内浦岳發火動山海蒼海水溢人夷溺死者甚多人里破壊船一百餘隻十四日自早旦封疆近里不異黄昏雨硫黄及白灰地震動毛降或蟲降至十五日天漸晴日月見

(北海道付属図書館北方資料館所蔵写本旧記)

「福山旧記」(天保五年編)

十三日午時ヨリ内浦ヨリ東夷地マテ津波商船夷舶夷船人数七百餘人溺死同時内浦岳焼崩レ松前上ノ国迄焼灰降ル。

(大森, 1918 : 日本噴火志)

「紀事弘賢覚書」

十七年庚辰夏六月十三日癸亥、陸奥松前蝦夷地、天暗不辯咫尺、迄十五日乙丑禺中、面僅識人面、及日午始明、同時距松前行八日路程宇知浦、大濤起、壞山襄陵、十里間山壑發火、炎飛空、人死者七百餘、馬牛魚鳥復亡無算、灰燼埋池丈七尺許、至秋八月鳴動未熄、焦土入海、竟生一大島。

(大森, 1918 : 日本噴火志)

「津輕一統史」

津輕一統史 卷之九

松前津浪及江刺岳振動

附相御預並二年飢饉の事

(寛永)同十七年庚申年松前上の国津浪あり江刺岳焼け出し六月十三日より同十六日まで同地暗夜の如く晝(昼)も燈火を用ゆ其燃灰當地及び越後地までも降りしが當地も三日間日光を見ず灰降りて六七寸に積もれり同十四日大地震ありて晝夜二十度震動せしか岩木山亦鳴動して十五日より灰を降らす三日にして積灰三寸及ふ…。

(相坂・伊東, 1906 : 津輕一統史)

「津輕一統史付録 津輕秘鑑」

・(寛永十七年六月)松前アサシ嶽噴火焼灰降りて當國到り震動激烈。

(相坂慶助, 1906、津輕一統史)

・(寛永十七年六月)松前エサシ嶽噴火焼灰降りテ當國到り震動激烈。

(大森, 1918 : 日本噴火志)

「日本災異志」

六月十三日茅部郡内浦嶽駒ヶ岳噴火、山峯焚頽而墮干海木石飛散、海嘯大起、死者千人許、松前城下、小石堆積三尺、是日巳時、蝦夷地及陸奥国、一天俄暗、經三日物色始鮮明、噴火凡□[しんにゅうに台]八月二十二日而熄。

(大森, 1918 : 日本噴火志)

「松前累世ノ家譜」

・寛永一七年六月十三日亀田ヨリ十勝二至ルマデ逆浪陸地ニアフル。人家悉ク漂流ス。人命及アイヌノ溺死者七百。(勝井ほか, 1975)

・寛永十七年六月十三日東蝦夷地自戸勝(十勝)至亀田村逆波溢陸地人家悉漂流人民□蝦夷等数七百餘溺死同日内浦嶽焼崩其灰(充?)満虚空自十四日巳刻至十五日

午刻島中口闇夜(北海道庁文書館所蔵写本)

「北海道志」

内浦嶽今駒ヶ嶽ト云噴火シ飛灰空ニ満チ晝暗キコト二日。

(大森, 1918 : 日本噴火志)

7.2 元禄7年(1694年)の噴火

1694年の噴火の記録は少なく、現在見つかっているのは以下の2つのみである。

「津軽藩御国日記」

元禄7年(1694年) 7月11日

「去頃松前山焼侯に付青森町奉行党書差出之記

一。松前山うちうちの嵩と申侯而松前より五日路余下り国に卸座侯、先年寛永十八年從六月十三日焼、松前並南部にても大つなみにて人死有之由申侯、其節舌森浜塩二十間程沖江引申侯由、

一。右うちうら嵩先年の焼残、去四日の朝より六日迄焼震動電有之由。(後略)」
(勝井・石川, 1981)

*寛永18年は寛永17年の誤記

「松前蝦夷記」

「内浦嶽ト申山廿四年以前焼申侯由而ニ大キ成焼山也、焼跡洞見ユル」

(榎森, 1974 : 松前町史)

焼跡洞：噴火の余韻を残した火口の様子を示している

「松前蝦夷記」は享保2年(1717年)に幕府巡見使一行が松前藩領内を見聞した記録。享保2年から24年目は1693にあたり、「津軽藩御国日記」とは1年ずれている。しかし「津軽藩御国日記」の方が、噴火とほぼ同時に書かれたと考えられるため信頼性が高いと考えられる(古川・他, 1997)。

7.3 明和2年(1765年)の噴火

1694年(元禄7年)の噴火後、1765年(明和2年)に噴火のあったことが簡単に記述されているが、それらの噴火に対応する噴出物は残されていない。明和2年(1765年)に噴火をしたという次のような簡単な記述が、安政3年(1856年)の噴火記録の中にみられる。

「蝦夷地土産」(安政四年巳三月二十七日菴原 斎著)

駒嶽といへるは一名内浦ヶ嶽又の名は茅部山などと呼び内浦のうちかげかやぺないといへる場所において有名の霊山なり、明和二酉年前に炎上せるよし古老伝説にして今年迄焼出たる事なし然るに安政三丙辰年八月廿六日暁いづくともなく震動する事夥し・・・

この記述に「…明和二酉年前に炎上せるよし古老伝説にして…」とあるように、約70年後に始めて記録されたものである。記述が簡単すぎて、どのような噴火であったかは不明である。この記述は伝聞されたものを記載したものであり、またこの噴火の記述が少ないことからこの噴火の存在は極めて疑わしいものである。よってこの噴火の存在についてはなお検討を要する。

7.4 安政3年(1856年)の噴火

安政3年の噴火は、比較的多くの古文書に記録されている。勝井ほか(1975)から以上のうち、いくつかを原文のまま以下に収録する。

「北遊乗」：安政三・四年(1856～1857年)姫路の儒者 菅野潔の紀行録

安政三年七月二十三日前略既還津館、闔街騒然有屋傾者、有壁壞者、忽有人走叫日、海嘯至、老弱相扶狂呼犇駭、男婦負家什而走、須臾〔白のあいだに人〕海潮果上岸一進一退如嘘吸者、衝戸凡八至夜始定、聞奥山東潮上平地五尺許、人人乘屋避之、屋小者随漂〔風へんに易〕、尚酸典矣(津館トハ函館ナリ)。烟同八月二十六日在越払内(今ノ大津)日已映黄烟蔽空、沙下如雨頃之飛砂稍疎、繼以白灰、愈下愈密、戸庭間積已寸餘、四面模糊如雪、白日暝黒不辯咫尺、蓋時未到〔日へんに甫〕也、命点燈燭、命日天変至此海嘯或起、急命晚餐、餐畢電光一射、窓紙欲破、声随而度、如迅雷之破耳、大愕、出戸探之、硫臭衝鼻、炎氣如煦、始知西方火山怒脈方発。

一内浦嶽随方変態、宿野辺路上望之、如驕馬之仰空嘶(土俗呼日駒ヶ岳正指其前面也)在砂原之如覆盆状、内浦湾航中望之峰山如芙蓉。

一九月二十四日至二十七日在毛呂闌、風雪〔拾に升〕戸、峭寒守爐、内浦岳在南奥山直面、宿雲帽頂、但夜間微吐〔焰〕、紅光灼雲、館人日嶽經硫災昼間噴煙、夜間発火、地常微動、近嶽人家恟々不妥、又日、嶽麓有温泉、(地属鹿部)火脈方発、震響如巨煩高崖応響而頽、泉槽随破浴者二十八人皆圧死、埋没不獲、實八月二十六

日也、聞者莫不酸鼻。

(加藤, 1909)

「協和私役」：安政三年(1856年)佐倉藩士窪田子蔵著、漢文蝦夷地紀行日記

(安政三年八月二十六日十勝大津ニテ)二十六日大風雨海岸ユクベカラズ西天ニ雲起ルソノ色黄黒通常ノモノニアラズ コレハ推レ出レ忽チ天ヲオオ フ初メ細砂次ニ焼砂、白灰又繼テトビ来リ天色マスマスクラレ 只東南天ト水ト連ナル所ノミカシカニ明ニ見ユ(中略)日クル忽飛雷空中ニヒラメク如ク室内コトゴトク明ナリ 皆オドロキテコレヲ見ル 忽チ又雷トドロキ耳ロノシ心鎮ス衆人皆去リテ室中ニ入ル ギロンフンブン雷ナリトシ山焼ノ声ナリトシ已ニシテ声ナシ 衆因テ山ノ焼出ノ声トナス サレドコレ何山ナルカヲ知ラズ ウスナリトイヒ又タルマイナリトイヒリ 二十七日白灰フリテ止ム平地ツモルコト六七分」

(九月七日 白老ニテ)九月七日 勇払ヲ出デ白老二連ス 七十以上ノ老人ニキク コノ人ハ七月中勇払マデ案内セルモノナリ 此人ハ佐原山(駒ヶ岳)ヤケノ件(八月二十六日)其日ハ西風ナレバ佐原ノ方ヨリ黒雲吹き起リ直チニ西(西)ノ方ニ至ル此地風脇ナレバ砂フルコト少シ 申(西南西)ノ方ハ三四寸地上ニ積リタリ彼ノ申ノ方ニ吹キオクレシ雲ノ中電光オビタダシク雷声又ハナハダシ其后ツグルモノアリ 駒ヶ岳ノ東一ノ瘤山アリコレハ二十年来新ニ吹キ出セル山ナリ(有珠山と思われる) 年々大ニ長ジスレバ土人皆怪有ノ思ヲナセシニ果シテ此ノ如キコトニ及ベリ(即チ噴火セリ)シカベハ灰燼ニ埋没シ ホンベツハ人家コトゴトク焼石ニ打クダケ且火起リテソレヲモヤキホロボセリ 又山ノ南ニ留ノユトイフ温泉アリ来浴セルモノ二八人 内父子二人ノガレ去ル 其他皆圧死セラル。(後略)

(九月ト四日鷲ノ木ニテキク)(中略)

「ポンベツノ人橋ノ下ニノガルモノ四十余人皆全シ トミノ湯(留ノ湯)ニ来浴スルモノ二十八人コノ中頭髮ヲヤキテニゲタルモノ一人ナリ余ハ皆圧死ス」「此日朝山ノ方ニ当リ五色ノ雲起リシトゾ 来浴スルモノ目出度シト思ハルレバ盟嗽シテコレヲ拝セリ コレ山ヤケノ始 硫黄炎出ヅル烟ナリ 知ラザルコハアワレナリ 已ニシテ山ヤケ出ン山ノ頂上ノ内抜ケ出デ物ノフタヲトリタル如ク飛ンデ留ノ湯浴室ノ上ニ落ツ サレバニグルモ走ルモ成間敷ニヨキモ運ツヨキモノナレバコソ一人ニガレ走ルヲ得タルナレ」

其后コレヲ掘出サント一丈余ホリ下ゲケレド死骸出デズトイフ 佐原岳ノ北ハ変化ナシ サレド土人コトゴトクノガレテワシノ木ニ至ル 南部陣屋話ノ人モ亦ノガレ去ル 陣役志村源作下役福田某ノミ止マリテ去ラズ 函館ヨリ使来リテ去ラシム 二日ヲ経テ鷲ノ木ニ立去レリ 職ヲ守ルモノ此ノ如クアリタキコト

(河野常吉の筆記を田中館秀三が写した手記。括弧内勝井ほか(1975)により加筆)(勝井・他、1975)

「観国録」安政三・四年備後福山藩士石川和助が藩命にて蝦夷地を探險せし時の日記

(安政三年八月)二十五日夕ヨリ暴風雨嗽翌日モ止マズ 未ダハレズ午后三時黄雲西ヨリ起ル物ハ皆黄色ニ見ユ 月蝕ノ如シ次ニ細砂ハ下レリ 草木ノ春雪ノツモレル如シ 室内ハ暗淡トシテ物色分明ナラザル故燈火ヲツケタリ 四時ニハ黄色ハ漸クウスクタ方消エナレド四面迷濤トシテ灰フルコト闌(夥)シ 夜天ハレタリ庭上ノ積厚五六分 海面ハ波タカク怒濤ハ門前ニ至ル

九月二十九日噴火灰半腹以下ニツミ皚相ツミ新雪ノ如シ 深サ三丈ニ至ル所アリ

(河野常吉の筆記を田中館秀三が写した手記。括弧内勝井ほか(1975)により加筆)(勝井・他, 1975)

「蝦夷地土産」：安政四年(1856年)三月二七日奇堂主人庵原口(口くさかんむりに函)齊著(全文)

駒嶽といへるは一名内浦ヶ嶽又の名は茅部山などと呼び内浦のうちかげかやペないといへる場所において有名の霊山なり、明和二酉年前に炎上せるよし古老伝説にして今年迄焼出たる事なし然るに安政三丙辰年八月廿六日暁いづくともなく震動する事夥し鹿部本別亀とまり辺或はとめの温泉に浴せる人々何れも箱館大地震ならんなどと餘所事の様に思ひ居たりしに昼九時頃駒嶽の方に当雷鳴の如く大ひなる響あり忽ち黒煙吹出し鹿部ホンベツ辺居小屋の屋根へ焼石飛来り硫黄の火降觸るゝ所へ焼付たる故防がんとすれば吹散らず焼石に頂を打れ手足を損し防べき手便もなく逃出けるに猛火降来大石を吹出所々へ散乱す其上風烈しくうづまき出る黒煙を吹掛け闇夜の如く眼闇み寸歩も行事能はず家に居れば火炎吹込戸外へ出れば頭上へ大石当り氣絶せるもの多く幼児を背負老父母をいたはり迷ふいづくも同じ事なれば肩背へ火燃付くゝり上げたる裳へ焼込難儀いふ斗なしよりて人々樽をかぶり或は盥を笠とし筑摩の祭にあらねども鍋を冠り釜を戴き心々種々さまざまに工夫して逃たりける一同つかれ果ポンベツ橋下にて暫く凌ぎ居たり幸ひなるかな川水一滴も流れず是不審なり乍去橋下にイむ事を得たり此事はとめの湯の条に委しかくて此所に集れるもの共評議して此体にては中々佐原の方へ行がたし臼尻川汲の方へ行べしとて立出けるに頭上へ硫黄の火降掛り衣服へ流れながら燃える故防ぐ事能はず多くは着類を打捨裸躬になり灼傷し大石に手足を損じ歩行捗取らず又々鳴動して焼抜折節西南風烈敷鹿部の方へ進む事能はず別而此處は風下故煙はさらなりまた本別の方を見れば焼石砂に火交散乱家々は火移り暫時に不残焼失す其後聞けば無難の家二軒あり此枉屋に入りて多人数凌ぎたりとぞ茅部の方も所々へ火燃付二軒焼失其餘は幸にして消留たり。

一、野飼馬数頭荷物運送の牛馬数しれず斃る。

一、鹿部ポンベツ両所にて家数三十五軒人別百八十二人焼失家十七軒内十五軒本別分明小屋物置納屋板蔵都合十二ヶ所船小屋七ヶ所磯船持府船都合十二艘焼死二人一人は八十四一人は七十三何れも隠居同様子供存命せり迫々臼尻川汲の方へ逃去り少々づゝ疵受ざる者なし乍去一同恙なし川汲に詰合たる官吏臼尻へ出張して怪我人をいたはり村口〔にすいのない凜〕を開ひて窮民の夫食となさしむ依之一同

安堵し官の御仁恵を歎びける。

一、とめの温泉に湯治せるもの凡二十二人前条の如く火の付たる石礫土砂疾風に急雨雹霰を送るが如く飛来暫時の間に堆事三丈餘其土崖崩れ沸騰せる湧口二三ヶ所出来せり如斯焼石土砂にて山も野も河も平一面の崔鬼と変じ大沼より流来泉脈を堰留しばらく水も流れずこゝにおいて前条橋下にて凌げるもの共幸を得たり迫々水衝湛へ近辺に又沼を生ず其降埋たる焼石土砂の上を打越して流るゝ故熱湯川をなす事なればうなぎ雑魚の類皆死して流れたりといふ一二宿を経ぬれば彼の橋下など中央は熱湯汀の方は程よき加減にて入湯自由を得たりとぞ

一、石松と云ものゝ女房眼病故召具して湯治せるに廿六日は朝より風もなく日和もよければ幼児を背負て石松は大沼へ釣に行たりしに九時頃俄に駒ヶ嶽動揺し振動移夥大雷頭上に落かゝる如く響渡り黒煙吹出石を飛し砂を降らし暫時に黒闇と変じたれば逃出るに方角を失ひしが峠の方を志し足に任せて走り行難なく峠下村へ着たり前条の如く温泉場は焼土砂大石小石降埋め山崩れ其場に居合たるもの共十九人程死亡せる事なれど石松は其変事を見ながら道遠ければ妻を救ふ事能はず幼児を背負て箱館へ立戻り妻の菩提を弔ひける。

一、エトロフ島の支配人越前屋卯兵衛邸は外一(ロ一)と呼て福有のものなりしが古疾を治せん為め女房飯炊外に一人供して湯治して居たりしに此変災に出会四人共其行へをしらず定て皆死亡せる事なるべし。

一、湯治場より川を隔山趾に木伐り居たるものあり数千の大雷落かゝる如き響ありし故其儘逃出けるが東西を取失ひ迷ふうち忽ち焼砂四五寸積りたれば其中を歩行故灼焼して進みがたく無餘義大沼の汀を行事一里許風穩になりたれば格別石砂飛来らず漸々陸へ揚り峠下村を打過一の渡村へ来り知るべの方へ立寄たれば安心せる故か灼傷腫痛み一步も行事能はず此所に止り養生して居たりける以上湯治場に居合たるもの共凡二十三人程其内二三人残り餘は不残死亡せり

一、鮎田村の喜七と云ふものかやべより買荷連送のため馬六七頭に駄し率来りしにスクノッペを打過沼の傍を通りけるに大雷の如く鳴動せり是又箱館大地震ならんと思ひつゝ馬を進めて行程に大なる響して山抜け黒煙突出大地轟きトントンゴトゴトと大なる鳴音聞え脇の中央へ焼たる大石降来る事雨足より甚し池中沸騰して蒸氣遙の空に昇り其形鱈の雲腸の如く突亢として大山の湧出せるに似たり桃色薄紫薄紅浅黄白など色取にひとし至て美事なり依之川汲白尻其外大野一の渡のもの共此蒸氣を見て村翁老婦は御来迎なりとて合掌し拝しけるとぞ追々スクノッペより婦女子共逃来り馬に乗せて救ひ給へと云何れも見知たる人々故いなみもならず荷を打捨乗らしめ大野迄連行しとぞ

一、亀とまりといへるは鹿部の入口にして家数十軒程あり前は海後ろは山にて温泉湧壺二口あり冷熱僅に隔つ傍に小屋ありて見守其所に住す白尻より湯治に来居たる幼女廿六日の朝米を洗に流しへ行たりしに灰降来りし故其米を打捨あわたゞしく帰り来り如斯々々定て駒ヶ嶽焼出すべしわらはゝ白尻へ戻るなりと徒跣にて逃出しける温泉見守の老父場治せる人々に申しけるは去廿四日より今廿六日朝迄三日間駒ヶ嶽折々鳴動せり定て焼出可申私儀は年老の歩行捗取らず若者共を残し置御世話可為致なれども各方にも疾く逃給へ今女子のことば如何にも不審なり

かゝる幼婦の日上とも思はれず定て神ののりうつりいましめ給ふなるべしと云捨て足早に駈出ける是を見て思ひ思ひに逃散臼尻さして浜伝ひ走り行たり箱館より来れる商人宿り居たりしが其抜子を聞て荷物を捨置同じく駈出たるに火降所々へ燃付ければたまり兼ねむぢりを(半天の事なり)打梢々々走りけるあはてゝ消したる事故火気残り背中より燃出し髪悉く焼たりとぞ如斯迫々逃出しければ防ぐものなく遂に此温泉場も焼失せり

一、同所昆布稼に行たりし者あり老父母をいざなび妻と幼児一人を引具し丸小屋を取建稼居たりしに最早昆布も干乾し終り荷造日和を待出船せんと心がけけふは風もなく澄晴なれば浜へ出て諸仕舞して居たるに雷鳴の如く大なる鳴音聞へ程なく黒煙巻上り焼石土砂を吹散す事電靄の如し直さま小屋へ庚り夫は着替入たる柳骨折を背に掛け妻は子を抱て逃出るに父母見へざれば怪んで立戻り丸小屋を見れど不居合呼立れど音信なしされば疾く逃去り給ふならんと跡を追ふて浜伝ひ走りければ焼石飛来て夫の左手の甲に当りぐさとさす角先掌へ拔出たるを振捨て血出るをも厭はず手拭もて包み逃来れる由其道連になりしものゝ物語にて聞たりとぞ

一、東地登りの船エリモ岬を廻り沖掛りし夫より段々走り来南部の尻矢岬を見なし蝦夷地方を二十里餘り隔たる沖合走りけるに焚石数多飛来船の矢倉へ落たりとぞ遠方へ飛行しものとは間えし此間に村落あらば悉く焼失すべし

一、小安村の何某と云もの熊とまりといふ所へ昆布稼に行て浜辺へ丸小屋を掛け稼居たるに此変災に逢ふて取ものも取あへず妻子引連いたぎと云所へ逃来り一宿を経て帰り見れば住家に一物なく悉く盜賊に逢しとぞ此あたり茅部ポンベツのものども素より善悪邪正はあるならひなれども難破船などあれば救はせて却て荷物等押隠し金子など分捕するの癖ありて小倫を好めり去年ポンベツのもの共破船の荷物盗取山へ持行柄の長き鎌を以切とき箱に餘る金銀奪取多くの人に難義を掛け剩其所業を異見せし善人をうとみ村所を追払などせる報にやこたびかゝる変災に逢ひ家蔵雜具船飼馬迄も悉く焼失ひ殆ど生活の道尽果ぬるは何さまゆへよしもありぬべし

一、風呂敷包を背負て来れる姫あり其包より煙立昇り火燃出んとする故かたへのもの怪んで老婦をして其包を捨しむ果して火燃出打捨たる処の垣四五尺焼て其儘消へ近傍の家におよぼさず見る人驚き姫の恙なきにの差なきを歎びけり其後聞けば老婦の子川汲の者なるが親類へ行て去暮ポンベツにて破船のありし砌黄金もゝを奪去り多くの人に難儀を掛けし其報ひならんと人々指さしていひあへり

右は巷談街説取るに足らずといへども淵源なきにあらず天に口なくしていはしむる諺周易に日積善の家には有餘慶積不善の家には餘殃あり実に懼るべき事共なり

一、佐原懸り澗尾白内毛利の四ヶ所は皆駒ヶ嶽の山趾なれば此変事を聞て悉く驚の木へ逃集南部家勤番人数も佐原へ詰合たれば是も同じく驚の木へつばみけるが何れも無別条風の間に関に灰降りたるのみなり九月朔日は風もなく静かなる日和なりしが夕景北風吹出し灰を飛し上湯の川亀尾辺へも灰降り木葉白くなり草刈などの草鞋かけ悉く真白に変してゴソゴソと強張たり

追て勢穩になりたれどもむかしの如く火炎山になりたりける追々硫黄を産すべ

し但火薬の内硝石は天造と人工と兩種あり灰は素より本草の茎は天工にして灰となすは人造なり硫黄においては天造のみにして土産なきときは殆ど差支る事有べし蝦夷洲は火炎山所々にありて尽る期あるなしといへどもこたび又一つの火炎山を増し武備第一の品を産出す天幸といふべし目出度かりける事共也。

(田中館, 1930)

「堀織部正届書」

(安政三年八月)廿六日ノ巳下刻(午前十一時)鳴ドーハグレ中蜂ヤケノケ烟吹き出レ中天ヲオオヒ北西風ハゲシク火石トビ人家ハ四ヶ所炎立ゲニツキ支配向差遣見分吟味ツカマツラセ候。オモムキ左ニ申シテ執風(疾風?)ニテ焼失屋十七軒鹿部本別トモ外大破ソン家十五軒右ノ外空小屋物オキ船小屋漁船数多焼失イタシ候。焼死鹿部ニテ二人石ニウタレ火ヲカブリケガ人数多出来タレド何レモ少シキヅニ候。行衛不明者十五人ハ温泉ニ居リシモノナラン。留ノ湯ハ三丈程埋マリソノ上湖水トナリ死者ヲホリサガス手段ナケレドモ皆コレ等ハ死セルナラン。サハラ、カ、リマ、ワシキノ地内ノ森尾白内ノ者共居室ヲステヒナンセリ。后一ヶ月ニテモ未ダ烟吹き出シ風ニヨリテハヤケ土フリカ、ル故マダ帰来セズ故米ヲ下ゲソノ上小屋ガケ料カシワタセリ鹿部越ノ所大木ハサケ又根ガヘシ其上ヤケ地大石ニテ道ヲ埋メタリ。漸ク此節人馬通行シ得又宿野辺ノ山道ハ無難ナリキ。

(河野常吉の筆記を田中館秀三が写した手記。括弧内勝井ほか(1975)により加筆)(勝井・他, 1975)

「平沢豊作日記 探蝦録」

函館ヨリ見ル二十五日大風雨。二十六日雨フリ五ツドキ天気九ツ半ニ寅ノ方ニ雲起リ未申ノ方ヘ行キ北ノ方駒ヶ嶽ギワヨリ又小雲見エタリ。クレ方マデ色水アサギ色ニシテ綿ヲ散ラセル如ク見ユ。八ツ半時函館地シン。翌二十七日ニコマガタケ噴火ノコトヲキ、タリ。

九月八日ノ夜五ツ半地震九日八ツ時地震。十二日明六ツ半ニ地震昼又地震。

(河野常吉の筆記を田中館秀三が写した手記)(勝井・他, 1975)

「泰平年表」(探蝦録)

八月二十七日奥州箱館駒ヶ嶽焼出、熱湯涌出、多人死亡有之ト云。

(大森, 1918: 日本噴火志)

「東久世長官日録」: 明治2年(1869年)開拓使長官任命以来同四年(1871年)九月に至る日誌 東久世通禧著

明治三年八月十二日 十年前噴火今ナホ烟ヲ見ル

(河野常吉の筆記を田中館秀三が写した手記)(勝井・他, 1975)

「北海道志」

八月二十六日駒ヶ嶽(又名左原嶽)震動シ噴火ス鹿部本別等ノ村石降ル雹ノ如ク

廬舎焼ケ人畜多ク死シ、□〔石へんに鬼〕磊野ヲ埋メ堆テ三丈二及ブ。

(大森, 1918: 日本噴火志)

以上の文献のほかに下記の文献にも記録が残されている(田中館, 1930)。

「大宝恵」安政元年(1854年)より明治初年(1868年)に至る函館尾山家日記

「公私日記」嘉永元年(1848年)より安政六年(1859年)六月に至る迄の木村源吾重直日記

「新羅之記録」正保三年(1646年)の松前家系諸を訂正増補したもの。

「簡約松浦武四郎伝」、「松前累世の家諸」

7.5 明治21年(1888年)の噴火

安政3年の大噴火のあと明治21年(1888)4月14日、駒ヶ岳は32年ぶりに活動を行った。このときの噴火は小規模なもので被害はなかった。この噴火に関しては以下のような記録が残されている。

「官報明治二十一年五月二日発行」

二十一年四月十四日茅部郡駒ヶ岳噴火ス。爆発ノ箇所極メテ小ナリ。噴火ノ際突然砲声ノ如キヒビキ二回アリ。当日午后一時スギ噴火シ凡ソ一時間計リ噴烟ヲ望ム。

「日本噴火志」(大森, 1918)

明治二十一年小噴火

火口内ニハ二個ノ小坑アリテ一ハ中央ニアリテ楕円形ヲ為シ長径1050尺餘、短径八九〇尺餘。深サ凡二百尺アリテ安政ノ初硫泥ト浮石ヲ噴出セリ。他ノ一個ハ此坑ノ少シク西北ニ当リテ其直径凡八三〇尺ニ達シ明治二十一年ノ小噴出ハ此坑ニ起レリ、現今ハ其周囲 硫黄ヲ含ミタル泥土ノ堆積アリテ其深サハ坑内濃煙アルヲ以テ量リ知ルベカラズ。(明治二十一年西山氏実見神保博士北海道地質報文ニヨル)

以上の他、「函館新聞」(明治21年4月15日発行)にも、当時の記録が残されている。

7.6 明治38年(1905年)の噴火

明治21年の小爆発の17年後、駒ヶ岳は明治38年(1905年)8月に再び小爆発を行った。この噴火については大森(1918)によって次のような記述が収録されている。

「日本噴火志」(大森, 1918)

「北海道庁 噴火調査ニヨル」

八月十七日ヨリ十八日ニ亘リ小鳴動アリ十九日朝ニ至リ爆発ス、続テ二十一日ヨリ二十三日迄ハ爆発最モ烈シク岩塊及灰砂ヲ噴出シ黒煙ノ高サ三千尺ニ達ス降灰ハ火口ヨリ二千里半以内ノ地ニシテ東ハ本別、西ハ宿野辺、北西ハ森、北ハ砂原ニ

達シ其面積約十万里ニ達セルモ降灰量僅少ニシテ被害ナシ。

「震災予防調査会報告第六十二号」(加藤, 1909)

十六七日ノ頃多少其兆ヲ呈シ十九日朝稍々顕著ナル爆発ヲナシタルモノノ如シ、安政ノ火孔ノ南隣ノ新噴火礼ヨリ盛ニ無煙ヲ吐キツヽアリテ直上少ナクトモ二三百米ニ達シタリト云ヘリ、第二回ノ爆裂ハ二十一日ヨリ二十三日ニ亘リテ黒煙噴騰直上千米ニ達セシト云フ、其他二十五日、三十一日夜、九月一日暁等ニ於テモ甚シキ噴煙アリタレドモ、要スルニ迫々ト其活動力ヲ減ジタルモノノ如シ、当時東風ナリシヲ以テ灰ハ西麓森村及ビ尾白内村地方ニ飛散シタシレドモ少量ニシテ大ナル損害ナシ、然レドモ此火山灰ハ楕円形火口及ビ押出沢火口ニハ可ナリノ厚サニ堆積死シ特ニ押出沢ニ於テハ当時ノ大雨ノ為メニ出水シ此灰ト岩塊トハ流水ノ為メニ下流ニ押出サレ海岸近ク迄ニ及ビ畑地ニ多少ノ害ヲ与ヘタリ。

森村報告要領 昨日(二十日)午後ヨリ天少コシク曇リ南東ノ疾風起リ稍々冷涼ヲ覺エ今朝(二十一日)ニ至リ天候陰濛トナリ益々冷氣ヲ感ゼリ而シテ風力モ亦益々強キヲ加フルト同時ニ四面晦暗ノ異状ヲ現シ火山灰ノ飛降スルヲ認ム且ツ大氣自ラ臭氣(恰モ少量ノ硫黄ヲ燻スルガ如シ)ヲ含メリ今其見聞スル所ヲ挙グレバ左ノ如シ

一)大字尾白内ノ現象 昨夜(二十日)九時頃ヨリ灰飛降シ人ノ面ニ触ル午前二時頃戸外ニ出デ觀測シタルニ駒ヶ岳頭上ヨリ黒煙、上騰スルヲ認メ且ツ鳴動(汽車ノ進行ノ如キ音響ナリト云フ)セルガ如キ感ヲ起シタリト云フ又本日(二十一日)降灰ヲ檢セルニ南瓜ノ葉面ニ堆積セルモノ毎葉約二勺程アリシト云フ而シテ降灰今猶止マズ

二)大字森村ノ現象 本朝(二十一日)迄ハ何人モ氣付カズ天候益々不穩ノ状態ヲ現ハシタルニ至リ初メテ降灰セルヲ認メタルガ如シ之ヲ尾白内ニ比スレバ其量甚ダ少ナシ而シテ今猶ホ降灰中

三)大字宿野辺村ノ現象 天候ハ前二村ト同様ナルモ今朝(二十一日)迄ハ降灰ヲ認メザリシト云フ。

森警察分署報告ノ要点 駒ヶ岳ノ噴火口ハ東南ニ面スル山腹ニシテ二十一日以來引キ続キ灰黒色ノ濛煙ヲ盛ニ昇騰シツヽアリシガ同日午後九時頃ヨリ十時迄約一時間尾色白内村及掛澗村等ニハ大風ノ吹き起ルガ如キ鳴動アリタリ然レドモ其当時ハ何等日異状ナカリシモ二十二日午前三時頃ニリ俄然駒ヶ岳ノ西北ニ面セル山腹ヨリ岩石混交ノ泥土湧出シテ尾白内村ニ流走スルニ至リシ処中途ニ稻生川アル為メ泥土ハ総テ此ノ川に注入シテ村落ニ害ヲ及ボサザリシガ農作物ニハ被害アリ其泥土ノ奔流セシ延長約一里幅二十間至七十間餘ニ亘リ午前十一時頃ヨリ一時流出止マリタリ去レト今後々如何ナル變動ヲ来スヤモ計リ難ク附近住民ハ恟々トシテ避難準備ヲ為スモノアルノ実況ナレバ分署ニテハ総員挙テ非常ヲ警戒中ナリ。

砂原村報告 本月二十一日午前十時頃ヨリ掛澗村ヨリ尾白内方面山麓ニ涉リー

分餘ノ降灰堆積セリ日々曇天ニテ山上ヲ望見スル能ハザルモ不取敢右及報告候也。

鹿部村戸長河野孝忠報告 本月十九日ヨリ駒ヶ岳南方半腹ニ於テ黒煙ノ著シク噴騰スルヲ認メタルニ同日午前一時頃本村字小川及字本別民等ハ該火山方面ニ音響アリタルヲ聞キシモノ有之旨申出之趣有之右報告ニ及候也

「日本噴火志」(大森, 1918)

「震災予防調査会報告欧文紀要第二卷」

降灰ハ年末迄デ多少継続セリ。

7.7 大正8～13年(1919、1922、1923、1924年)の小噴火

明治38年(1905年)の小噴火の14年後、駒ヶ岳は大正8年(1919年)から大正13年(1924年)にかけ小噴火を繰り返した。これらの活動はいずれも、小規模な水蒸気爆発と考えられ、ごく少量の降灰をもたらした程度で、被害はなかったとされている。これらの噴火の記録については駒ヶ岳爆発災害誌(北海道社会事業協会、1937)、今村(1919)、根本(1930)に次のように記録されている。

(1) 大正8年(1919年)6月17日

今村(1919)

6月17日ヲ第1回トシ、其後同24日、7月2日、同19日、同26日ニ噴火ス。前兆トシテ著シキ現象ナカリシモ、微震動並ニ鳴動ヲ伴ヒ、黒煙ハ頂上ヨリ1000米内外ノ高サニ昇レリ、7月2日ニ於ケル噴煙ハ、頂上ヨリ650米内外ノ高サニ昇騰セリ。

駒ヶ岳爆発災害誌(北海道社会事業協会, 1937)

6月16日午後3時54分より1分22秒間、南北部比較的大なる微震動の地震を函館測候所に観測し、また同日午後5時半頃、西麓宿野辺村にて遠雷の如き鳴動を聞き遂に16日*噴火となった。次いで24日午前1時頃、大沼駅にて雷鳴の如き音響を聞き、鹿部村にてもまた同時刻頃大鳴動を聞き降灰あり、城部沢方面山林に降灰稍著しく、尚7月2日午前3時、同19日午後5時頃鳴動と共に噴煙し、同26日午前10時にもかなりの噴煙があった。

* 恐らく誤記で17日と思われる(勝井ほか, 1975)

(2) 大正11年(1922年)5月22日

駒ヶ岳爆発災害誌(北海道社会事業協会, 1937)

多少火山活動に異状を呈せる程度であった。

(3) 大正12年(1923年) 2月27日・3月15日

駒ヶ岳爆発災害誌(北海道社会事業協会, 1937)

2月27日、午前7時頃突然噴煙し、砂原村に於ては鳴動を聞き、山麓西方に少量の降灰があった。

3月15日、午後2時10分頃、遠雷の如き音響を発すると共に黒煙を上げた。

(4) 大正13年(1924年) 7月31日

駿震時報 駒ヶ岳爆発噴火調査報告 (根本、1930)

同日午前8時頃より□〔戸に婁〕々鳴動し、同時30分頃小爆音と共に黒煙を吐き高さ7、8百尺(約250m)に達した。然し午後6時に至って鳴動止み、噴煙も12時には僅少となり、翌日は写真技師田中某登山せりと云われている。

7.8 昭和4年(1929年)の噴火

昭和4年(1929年)6月17日、駒ヶ岳は安政の大噴火以来73年ぶりに大きな活動を行った。この噴火については、神津ほか(1929、1932)、Tsuya et al. (1930)、赤木(1929)、根本(1930)、勝井ほか(1975)、勝井ほか(1986)などをはじめ多数の研究報告があり、また災害については駒ヶ岳爆発災害誌(北海道社会事業協会, 1937)に詳述されている。

北海道駒ヶ岳

令和 7 年 7 月 1 0 日発行

編集・発行 北海道駒ヶ岳火山防災協議会
